

2014 青梅アート・ジャム

# 作家のアトリエ展

7月19日(土)～8月31日(日)

会場：青梅市立美術館



# コンセプト

作品のアイデアや思想が詰まった「頭の中」とも呼べる大切な場所、アトリエ。それらをお見せする事によって、作家と来場者の心をより近づけられたら…

今年の青梅アート・ジャムは、「作家のアトリエ」をテーマに、作品の展示と参加作家それぞれの制作風景をイメージした空間を展開いたします。

# 参加作家

阿部 静（インスタレーション） 池田 菜摘（絵画）

伊藤 光治郎（木彫） 江見 高志（彫刻）

大川 真実子（インスタレーション） 塩野 圭子（型絵染）

杉本 洋（日本画） 鈴木 寿一（陶芸） 鈴木 ひろみ（版画）

長倉 陽一（日本画） 永島 貴幸（イラスト）

前田 純平（版画） 山口 幹也（木彫）

# イベント一覧

**オープニングレセプション**..... 2P

2014 年 7 月 19 日（土） 会場：青梅市立美術館、Dining & Gallery 蔦蔵

**ワークショップ「オリジナル草はがき作り」**..... 3P

2014 年 8 月 2 日（土） 会場：青梅市立美術館 市民ギャラリー

**ワークショップ「かんたん織りもの作り」**..... 4P

2014 年 8 月 3 日（日） 会場：青梅市立美術館 市民ギャラリー

**展覧会「作家のアトリエ」展**..... 5P

2014 年 7 月 19 日（土）～8 月 31 日（日） 会場：青梅市立美術館

**第 4 回 東日本大震災義援展**..... 19P

2014 年 5 月 5 日（月）～11（日） 会場：青梅市立美術館 市民ギャラリー

**アート・ジャム in カナダ 2014**..... 20P

2014 年 8 月 8 日（金）～16 日（土） 会場：Eclectic Gallery, Victoria BC

**ギャラリートーク「作家のアトリエ 展」**..... 21P

2014 年 8 月 24 日（日） 会場：青梅市立美術館



# オープニングレセプション

2014 年 7 月 19 日（土）

会場：青梅市立美術館、Dining & Gallery 蔦蔵



展覧会のオープニングというものは開く側にとって緊張するものです。作品の批評もさることながら、来賓の方々との交流の場ともなり、市長の御挨拶、美術館館長の祝辞などたくさんのお話を頂きました。

青梅アート・ジャムも年月を経て完成された作品だけではなく、未完成の作品展示という他の類を観ない方法を持ち込む事にもなりました。そのことに触れられ興味を示されたことに

作家は一同に笑みを浮かべました。

オープニングパーティーでは、作家の方々やお手伝いして下さった方々、又ご招待者の歓談の場となり、これからの会のあり方、又抱負なども聞かれ指針となれる話も聞かれました。

今後のより一層の努力、展開を期するオープニングとなりました。







## オリジナル草はがき作り

～どんな草でも紙になる！～

2014年8月2日(土) 会場: 青梅市立美術館 市民ギャラリー  
講師: 塩野 圭子、伊藤 光治郎、長倉 陽一、鈴木 ひろみ

今回は夏休み中という事で、小中学生対象の自由研究のお助け企画となりました。

私たちが普段何気なく使っている「紙」って、いったい何から作られているのでしょうか？

という問いかけから始まり、会場の子供達とのやり取りの中で、紙の原料は意外と身近な所からも手に入るという気づきにつなげます。

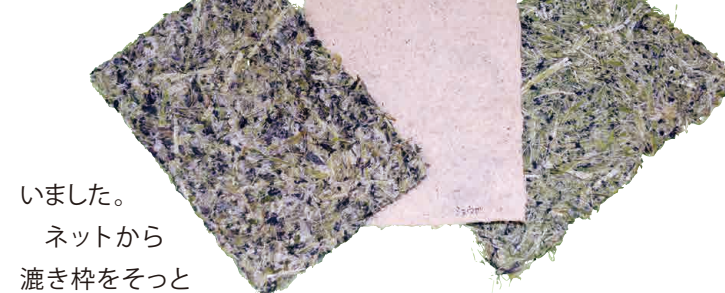
そこでみんなが持ち寄った草を使って、自分の力だけで世界にふたつとない草はがき作りがはじまりました。

まずハサミで草を刻み、板の上に乗せて木槌などでたたきつぶします。すり鉢でさらにすりつぶしザルに入れて水洗いすると、草の繊維だけが残ります。これを葛粉を薄く溶いた水に混ぜておきます。

一方水をはったバットにネットと漉き枠を重ねて浸し、草の繊維を静かに注ぎ入れネットごと枠を持ち上げて水を切り、枠だけを静かにはずします。タオルに挟んで上からおしつけ水分を取り、プラスチックファイルにそっと移し替えて持ち帰ります。

あとは窓ガラスや板に貼付けて、ゆっくり乾かせば草はがきの出来上がり！

時間の限られた中で子供達は、それぞれの行程にとても熱心に取り組んで



いました。

ネットから漉き枠をそっと

外し紙らしき形の物を手にした時、ドキドキ感があちこちで歓声になり、満足そうな笑顔がこぼれ出します。

自分の手を使って身近な材料から様々な物を作り出す楽しさを、これからもみつめて行ってほしいと思いました。



## かんたん織りものの作り

～いろんな布やヒモで飾り布を作ってみよう！～

2014年8月3日(日) 会場: 青梅市立美術館 市民ギャラリー  
講師: 鈴木 寿一、大川 真実子、前田 純平、山口 幹也

今回のワークショップは織物といっても専門的な道具や機を用いず、身近にある物を使ってコースターを織りました。

小学1年生から中学2年生まで幅広い年代の子供が集まりました。細かい作業に初め苦戦している子もいましたが、原理が分かると小学1年生の子も一人で織り進めていました。

段ボールを機の代わりに、割りばしをシャトル、フォークを綜絢(そうこう)として使いました。割りばしで縦糸を一本ずつすく、

その間に緯糸(よこいと)として細く裂いた布を通すのを繰り返して、織り上げていきます。沢山ある布の中から明るい色、淡い色と好みの色を選んだり、ひもやレースをポイントに入れたりそれぞれに工夫していました。

完成したコースターはみなその子のセンスが表れていて、同じ織り方でも一つ一つ違った印象のものが出来上がりました。







2014 青梅アート・ジャム 青梅市立美術館展示

## 作家のアトリエ展 2014 年 7 月 19 日 (土) ~ 8 月 31 日 (日)

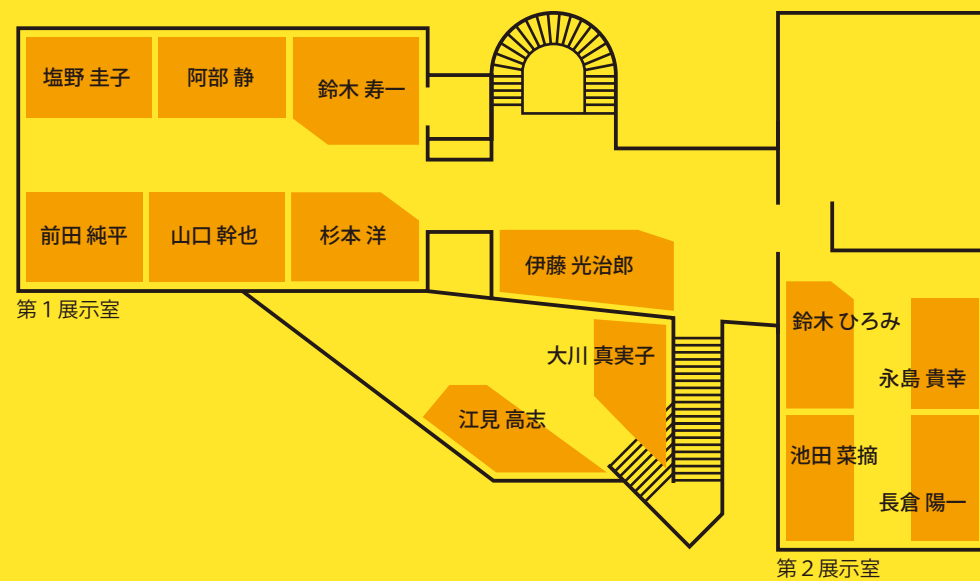
今回は「作家のアトリエ展」と題し、普段は公開される事の少ない作家のアトリエをテーマに、青梅アート・ジャムのメンバーがそれぞれ趣向を凝らし、自らのアトリエを再現またはアレンジし展示するという前代未聞の展覧会となりました。

作家にとってのアトリエとは、ただ単に制作の場とい

うだけでなくアイデアや思想が詰まった、言わば「頭の中」とも呼べる大切な場所。それを展示することで参加作家と来場者との心を通じ近づけられたらと考えました。美術館という制約の多い空間の中で、本来自由勝手に許されるアトリエを如何に表現するのか。展示の技量が試される難

しいテーマでしたが、蓋を開けてみると各作家の心憎い演出の数々で迫力満点の展覧会となりました。会期が学校の夏休み中ということもあり、子供たちなど前回より多くの方々にご来場頂き、ケーブルテレビで取り上げられるなど各方面から多くの反響もあり、手応えを感じています。

青梅アート・ジャムでは、「アートがこの地にできること」について常に考えてきました。今回の展覧会はその意味においても将来につながる意義ある展示であったと思います。



## 江見 高志

### 大切な場所

作家にとってアトリエは制作し思索する場です。私の場合それに加えて作品や原型、シリコン型の置き場でもあり、それらは日々増えていく一方です。

今度の展示ではそういったアトリエの雰囲気を出すと同時に、新旧の作品をざっとならべてみようと思いました。

黒い板が層を成した作品は昨年、広い展示空間のフローリングの床に大きく展開したもので、アトリエではコンパクトに積んであります。

桐の木を彫った作品は10年程前のものですが、右から左から大きくカットすると木が人体のようにくっついてきて制作は大変おもしろかったです。

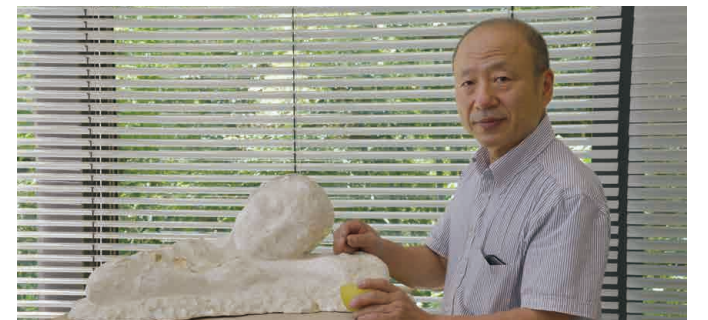
それから、湯道を溶接して竜を表現した作品。溪流

から大空へ駆け上る竜。湯道というのは溶けたブロンズ（溶湯）が作品となる空洞へ流れていく道のことをいいます。固まって冷めてから作品から切り離される要らない部分です。

他に鉄線を曲げて溶接した作品を積み上げたり吊り下げたりしたオブジェ、等々。

このように偶然にできる形が元になって作品が生まれ、旧作の凹凸が作る光と影からヒントを得て次の作品へと繋げ活動できるアトリエは何よりも大切な場所になりました。

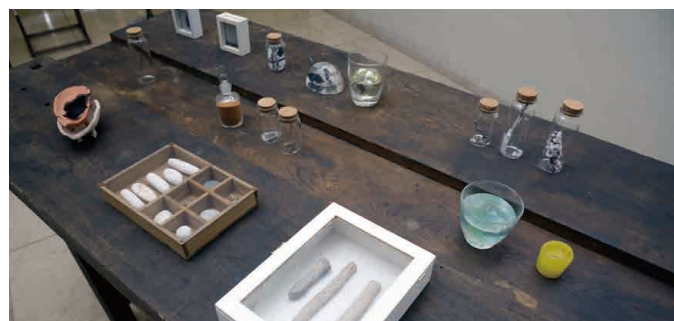
ノミ一本持って漂泊のすずしい旅はなかなかできそうにありません。



### 江見 高志（彫刻）

1951 年 岡山県に生まれる  
1985 年 東京藝術大学大学院彫刻科修了  
1989 年 ブロンズ作品によるインスタレーション  
個展 Key Gallery、KANEKO Art TOKYO 他多数  
グループ展 青梅アート・ジャム 他多数





# 大川 真実子

## アトリエ=場所、ではなく

今回の展示テーマは「作家のアトリエ」という事でしたが、私はアトリエがなく自宅のリビングで作っているの、分かりやすくアトリエという風にできないなと思いました。考えた末、インスタレーションのもとになる写真やドローイングと拾った石や小作品を配置しました。

小さい樹脂の作品や何の変哲もない石等、特に作品にしようというよりはドローイングの延長のような形で自分の好きな物を集めた

り、試しに作ったりしたものを展示しました。繋ぎ止められないものを繋ぎ止めておきたい。消えてしまうと分かっているのだけれど、それを自分の中に落とし込めたい、そういうことを思いながら制作をしています。

ドローイングや写真は学生の時の物もあり、時期や撮影場所も様々です。展示していくうちに関連性のあるようなものを集めて並べてみようと思いました。

### 大川 真実子(インスタレーション)

1985 年 東京都生まれ  
2009 年 多摩美術大学美術学部彫刻学科 卒業

自主企画グループ展

2009 年 イキキッテ オフレ マエニ (BOX-KI・O・KU)

2010 年 ふさがれた川を開く(旧平櫛田中部)

2011 年 手に氷を持ち歩き続ける(アキノタマビ 21)

2013 年 涯なく、奏でる(香川県三豊市 M 氏のアトリエ)

グループ展

2011 年 interactive-YOUTH- (ギャラリー櫛 B・C、同 2012 年) plus 展 part3 (ギャラリー櫛 plus)

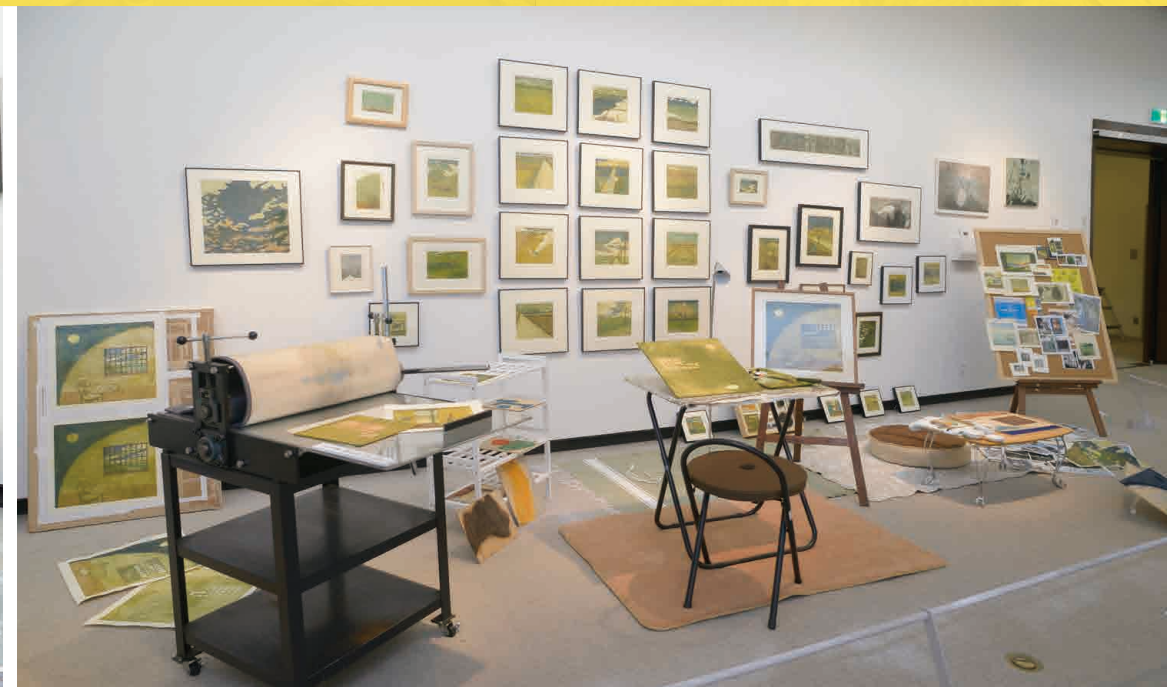
2012 年 フラット展(代官山ヒルサイドテラス A 棟ギャラリー、同 2013 年) はじまりはアートの旅 アートかれん 10 周年(ギャラリーかれん)

アートプログラム青梅 2012 (東京都青梅市)

2013 年 奈良・町家の芸術祭「HANARART はならあと」(奈良県五條市) 青梅アート・ジャム

個展

2012 年 雨を待つ (ギャラリー櫛 plus)



# 鈴木 ひろみ

## 木版画のある風景

私は木版画を制作しています。木版画の凹凸版刷りと呼ばれる技法です。

木版画というと浮世絵を思い浮かべる方も多いと思いますが、浮世絵の技法も使っています。浮世絵や小学校で習う木版画は「凸版刷り」です。色がつく場所を残して彫ります。これは「馬連」を使って手で刷ります。私はこれの上に銅版画で使われる「凹版刷り」を重ねます。こちらは彫ったところの溝に油性インクを詰めて、余分なインクは拭き取り銅版画用のプレス機で刷ります。

大まかに刷りはこの二つの作業を重ねて刷ります。

作業は自宅で行っています。プレス機は重いので普通の家だと床が凹んでしま

うため、自宅の外の倉庫を改装して、そこにプレス機を置いて作業場にしています。

下絵を描く時と版木を掘る作業は自宅の部屋で行いますので、アトリエという場所です。作業によって机を替えているので、机がたくさんあります。下絵を描き、版木を彫る用、水干絵の具を使う凸版刷り用、油性インクを使う凹版刷り用と。工程が多いので必然的に道具も多くなります。整理がなかなか難しいです。

下絵の時は風景の写真や、日常のちょっとした所から気になった物を見つけてきて、資料にします。資料はコルクボードに貼ったり、床に並べたり、そこから絵



にしていきます。絵にしてからそれを版木に写します。

私はビビッドな色があまり好きじゃなく、少しくすんだ色に魅力を感じています。水干絵の具のもともと明るい色をあえて凹版刷りで茶色の油性インクで木目を重ねる事で、独特のくすんだ風合いを出します。

絵ならずっと描ける線も彫刻刀で彫ると全く違います。それに版画は最後の版を刷るまでどうなるかわかりません。そこに面白さがあり、魅力があります。



### 鈴木 ひろみ (版画)

1987 年 埼玉県生まれ

2010 年 横浜美術短期大学 専攻科

絵画クラス修了

日本版画協会 第 78 回版画展

京都市美術館 入選

青梅アート・ジャム 2010 参加

第七回 大野城まどかびあ

版画ビエンナーレ展 入選

グループ展「woodcut collection

- 木よりいるものたち -

(art Truth)

グループ展「Holly Days, Holy

Nights」(ギャラリー上原)

グループ展「版画三人展」

(ギャラリーツープラス)

2011 年 グループ展「あおぞら DE アート

@ツープラス」(ギャラリーツー

プラス)

グループ展「Art Beat ~奏でる

アート~」(SAWYER CAFÉ)

個展「誰もいない街」

(ギャラリーツープラス)

2012 年 個展「そこにある風景」

(伊勢丹浦和店)





# 池田 菜摘

## 色々なアトリエ 線なしの描写

私は基本的に部屋の中で作業をするので、写真を使って描いています。ただそれだとやはり不完全ですので、なるべく外に出て、本物をスケッチするように心がけています。スケッチに行くのは主に近所の公園で、自然や建築、人、動物、風景等が揃っており、勝手ながら絶対のスケッチ用アトリエとして利用しています。自然の中を歩くと自分自身の癒しにもなり、本物にふれることで、写真ではわからない



その場の空気等も表現できるので、とても楽しく描くことができます。本番ではなるべく下描きをしなくて描くようにしています。以前は鉛筆で線を描いていたのですが、2年程前の制作中に突然「線に縛られるのが嫌だ、のびのび描きたい」と思ってそれまで描いていた絵をやめて、新しく描き直したのです。それが上手い具合に力が抜けて、それまで描いていたものよりも良くなり、それからは形の複雑なもの以外は下描きせずに、下描きしているものも鉛筆の線を残さないようにしています。今回展示した作品も、全て下描きしていません。



### 池田 菜摘（絵画）

- 1987 年 神奈川県生まれ
- 2005 年 横浜美術短期大学入学
- 2007 年 横浜北部美術公募展 2007 第 43 回 鎌倉美術展
- 2008 年 第 17 回 全日本アートサロン絵画大賞展 横浜北部美術公募展 2008 第 44 回 主体展
- 2009 年 横浜美術短期大学卒業 池田菜摘・宇津木綾子・田島愛及 3 人展「ノスタルジア」 OME ART JAM + 展示 第 61 回 中美展 第 33 回 風子会展
- 2010 年 第 89 回 朱葉会展
- 2011 年 ギャラリー La Mer 公募展「七人展 FLASH!」・「真夏のサムホール展」(2012) 東日本大震災義援展（以後 毎年） 第 24 回 日本の自然を描く展 2011 ソーヤーカフェ夏企画「西荻」百鬼夜行展
- 2012 年 個展「SEASONS」（銀座フォレストミニ） 青梅アート・ジャム 展示 ギャラリー La Mer 公募展「真夏のサムホール展」 アモーレ銀座企画展「天使・墮天使」・「幻想・狂乱」
- 2013 年 Gallery Conceal 企画展「ココロコロ」企画立案、展示 主体美術協会 神奈川作家展 第 9 回 ペラドンナ・アート展

# 長倉 陽一

## 文字を絵にしていると…

自分の絵は日本画の技法をベースにして制作しています。文字を書きそこに盛り上げに使うメディウムを載せて凸凹を作り、その凸凹にヤスリをかけます。その後にアクリル絵の具を塗って一度だけ黒い紙に刷るという工程をしてから日本画の絵の具で描いています。

初めに書いた文字のユニークな形や刷るときにできた色のグラデーションからできた意図しない色合い、アクリル絵の具の明るい色と日本画の落ち着いた色を利用して描けるところが制作しているうえで楽しいところです。

自分にとって文字は描くうえでも考えるうえでも欠かせません。

遠い昔から使い続けられ、そこには先人たちの想いや考えなどがユニークな形の中に込められています。その意味合いや形からイメージを広げていくことで当時の人が込めた想いや暮らしの感じが少し垣間見ているように感じ、それらを見ていると想像が膨らみます。文字のユニークな形を用いて描きながら、今の暮らしや自分自身のこと、自分が住んでいる土地のこと国のことなどいろいろと考えていきながら、これからも表現していきたいと思っています。



### 長倉 陽一（日本画）

- 1985 年 東京都生まれ
- 2006 年 第一歩展（日本橋 ギャラリー TT 日本橋） 北部横浜美術公募展 優秀賞（横浜）
- 2007 年 グループ展 第 1 回 百華展（以後、2009 年までに 5 回開催） 光の家ボランティア（埼玉 埼玉医科大学光の家毛呂病院）
- 2008 年 横浜美術短期大学専攻科 造形美術 絵画クラス卒業 横浜美術短期大学 専攻科有志～卒業制作小品展～（横浜） グループ展「room in the room」（青梅 / Dining & Gallery 蒔蔵）
- 2011 年 横浜美術大学・短期大学「飛翔する作家たち展」（たまプラーザ東急百貨店） 民話「送り狼と迎え狼」ワークショップ（ゆずの里勝仙閣） 朗読会（武蔵御嶽神社、軍畑、煉瓦堂朱とんぼ） 東日本大震災義援展（以後、毎年出展）
- 2012 年 パフォーマンス「おいぬさまの行列」（青梅駅～青梅市立美術館）、（軍畑、煉瓦堂朱とんぼ）
- 2013 年 パフォーマンス「送り狼と迎え狼」（吉川英治記念館） brilliant wing14 展（新宿）
- 2014 年 フラット展（代官山） rain days and…（銀座） Artjam from Japan（Canada） そのほか個展多数





## 永島 貴幸

### 人の心を動かすイラスト

自分はイラストレーションということで、他の方と比べるとやや毛色が違うかもしれません。

元々自分はどちらかと言えばコミックイラストに近い絵と、それを使ったアニメーションを制作していたんですが、そこから段々と自分の中で変化があって、趣味や嗜好、表現したいこと、表現の方法にズレを感じるようになり、気付くと今の絵柄に辿り着いていました。

それまではパソコンでの作業が中心だったので、アナログでの温かい表現に憧れたという部分もあります。

見た人が自然と笑顔になるような温かい絵を描きたい一方で、アニメーションを作っていた頃から、人の琴線に触れる、人の心を揺ら

したいという感覚は常にどこかに持ち続けています。

イラストというと基本的に目的やクライアントがあるもので、そういう場合はそれに合わせて描き方や方法を変えています。こうやって展示するような絵は自分の表現したいものを自由に描いています。

今回は作家のアトリエ展ということなので、メインに置いた絵は作業風景の一部としてあえて描きかけのような形で描きました。

一つの絵の中で作業密度の差を出してみるのも面白いと思ったので、塗り込みの多い部分とラフに下塗りをしただけの部分が混在しています。

また机の上に関しては、完全な再現とは言いません



が「作家個人にとっては使い慣れたごちゃごちゃした作業スペース」のイメージを感じてもらえたらと思います。

#### 永島 貴幸(イラスト)

1985 年 愛知県生まれ  
2009 年 私立横浜美術短期大学専攻科映像メディアデザインクラス卒業  
2012 年 専門学校東洋美術学校イラストレーション科イラストレーターコース卒業  
2013 年 11 月 台湾ポストカードコンテスト特別展  
12 月 ARTs\*LABo「天使・悪魔」展 2013、ポストカードコンテスト本選  
2014 年 7 月 HandMade In Japan Fes 出展

## 伊藤 光治郎

### 創作木彫と仏像の仕事が同居するアトリエ

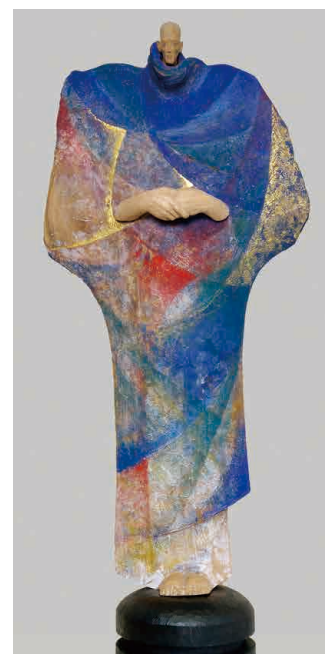
作家のアトリエというのは余り公開することはないようです。招き入れる人はごく限られた友人知人であり、誰もが入れるところではない。少なくとも私のところでは。

アトリエは作家の生活のなかで最も濃密なところで表現する為の引き出し易い場というものではないのか。その作家の特徴が現れてくるところがアトリエ・スタジオ・仕事場というものになるのではないかと。

最近、制作作品に彩色を施す彫刻を作りながら、「意識」のあり方に興味というか疑問というか、それを彫刻に表現するとどうなるのか。木彫は刃物持って削り表現するわけですが意識は

常に直に真向って作らねばならない。外方を向いては彫れない、怪我します。ですが彩色は完全に外方を向いても偶然のものとしてうまわれる。それが「かたち」として凝縮されたものが色によって拡散されて広がってゆく。その曖昧さがなんとも妙味なものであるわけ。しかし、その曖昧さが曖昧模煳ともなり得る。

「識闕」（しきいき：意識作用の生起と消失との境界）というものにひかれている。ものごとを五感に捉えても、すり抜けていくものがある。それを捕えるのには、外方を向いてしかつかまえられない。星をみても凝視してはみえないが、外すと視えてくるように。



#### 伊藤 光治郎 (木彫)

1945 年 山形県生まれ  
1988 年 創型会出品  
1995 年 創型会文部大臣奨励賞受賞  
2002 年 創型会賞受賞  
2008 年 無所属  
カナダ大使館 高円宮記念館「太平洋にかかる橋」展 出品  
2010 年 カナダ ビクトリア アート・ジャム展参加。レディスミスにてネイティブカナディアンと展覧会  
2013 年 宮城県栗原市 風の沢ミュージアムにて半年間個展  
陸前高田被災松にて「いのちを運ぶ」モニュメント制作  
日本美術家連盟会員





# 鈴木 寿一

## 粘土と共同生活するアトリエは、かび臭いぐらいが丁度良いイメージに合った白さを作り出す実験室のようなアトリエ

かつて焼き物は大地がアトリエでした。制作に必要な土も水も燃料もそこら中にある。焼き物の文化を持たない文明はありません。人々は山や川や森から材料を採取してやきものを作っていました。焼き物が土と水と炎の芸術と言われる所以です。そんな時代が1万年以上続いていましたが、産業革命のころになるとその様相は一変し、制作手段が大きく二つに分かれました。一つは機械化による大規模工場、もう一つは少人数の工房での制作です。そしてやがて、工房で制作をしていた人の中から個人作家として活動する人が現れました。

私も個人作家の端くれですが、工房（アトリエ）は、極めて狭く8畳ほどで、窯場と合

わせてもせいぜい20畳程度です。電気窯や土練機など便利な道具が普及し、ずいぶんコンパクトに焼き物が出る様にはなりましたが、土作り、成形、釉薬掛け、焼成など、工程が多いぶん、道具や原料の数も多く、工房はいつも足の踏み場がない程散らかっています。大地がアトリエとはえらい違いですが、それはそれで居心地の良いものです。

私の作品はほとんどが白い焼き物です。製作行程の中で白化粧という白色泥による装飾を施しますが、そのタイミングがなかなか難しく、作品を半乾きの状態で保存しなくてはなりません。少々蒸し蒸しするぐらいが粘土にとっては居心地が良いようで、そういう時は自分が辛抱します。粘土

と共同生活する陶芸家のアトリエはかび臭いぐらいが丁度良いようです。今回、美術館の展示ではさすがにかび臭いアトリエは再現出来ませんので、ややよそ行きの風景になってしまいました。展示品の中にある数種類の白い

粉は全て白化粧の原料で、それらの配合の割合を変えることで自分のイメージに合った白さを作り出しています。作品作りの傍らで、何度も土や釉の実験を繰り返します。実験室のような制作室のような、それが私のアトリエです。



### 鈴木 寿一（陶芸）

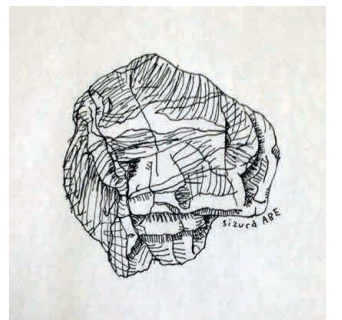
1963年 秋田県生まれ  
1990年 東京藝術大学大学院工芸科陶芸専攻修了  
1996年 青梅市日向和田に築窯 独立  
現在 明星大学、女子美術大学、横浜美術大学非常勤講師、日の出陶房講師  
個展 日本橋三越、青山桃林堂、Potter's pot、梅が丘アートセンター、工芸えんどう、青梅クラフト館 他  
作品収蔵 中国宜興陶瓷博物館

# 阿部 静

## 記憶と体験の場がアトリエ

近年、主にインスタレーションの形式を用いて作品を発表を行っています。展示空間との関わりから作品を作り出す過程で、わたしにとって実際のアトリエ（作業場所）はドローイングやプランスケッチ、現場で制作する為の下準備の場所という位置づけです。また、フィールドワークに於いて、表現するにあたっての根本的な意識や興味がそこに存在し、その中に入りこみ、それらを収集し、創造的な時間を多く費やしていることから、わたしにとっての本質的なアトリエは旅をしている時間や山に入っている空間などのフィールドであると言えます。今回の「作家のアトリエ」展ではその、わたしの本質的なアトリエ

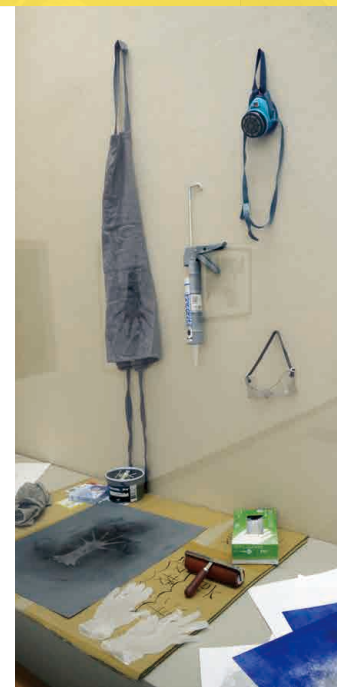
を公開しようと思い、紙媒体の展示となりました。旅の写真とテキスト記録のもの、物質的に収集した石や植物の写真、神楽舞や田楽などの民俗芸能の写真記録など。そこから紡いだドローイングやその先に展開されたインスタレーションのプランスケッチなどの資料です。それはドローイングや写真、文章などの単なるコピー紙の資料でしかないように見えるかもしれませんがわたしの表現に於いて重要な記憶で、記録であり、わたしのアトリエ空間と言える展示となりました。



### 阿部 静（インスタレーション）

1988年 東京都生まれ  
2008年 横浜美術短期大学絵画コース卒業 卒業制作短大賞受賞  
2009年 阿部 静展（銀座ギャラリーフォレスト / 東京）  
現代女子∞〜もの・いろ・かたち〜（ギャラリーツープラス / 東京）  
2010年 山手聖母愛児園 作品寄贈（横浜）  
「BankART School 田中 信太郎 ゼミグループ展 第一回蜷座展覧会 蜷座のぬけがら」(BankART Studio NYK / 横浜)  
2010 青梅アート・ジャム（青梅市立美術館、ゆずの里勝仙園 / 東京 以降毎年）  
Unknown possibility05（新宿眼科画廊 / 東京）  
年越し展（ゆずの里勝仙園 / 東京）  
2011年 東日本大震災復興支援チャリティアート展（Gallery COEXIST / 東京）  
横浜トリエンナーレ関連企画・横浜を撮る！ 捕る！ 獲る！、BankART Life 3（新・港村横浜）  
2012年 ハンマーヘッドスタジオ / 新・港区（オープンスタジオ / 横浜）  
ART JAM IN CANADA（Community Arts Council of Greater Victoria / カナダ）  
2013年 一枚の写真から生まれる多様性展（3331 Arts Chiyoda 東京）  
Constellations（Blanc Gallery マニラ、フィリピン）  
水際・瀬戸際・壁の裏（ハンマーヘッドスタジオ / 新・港区 横浜）





# 塩野 圭子

## 庭からつづく生活空間こそが私のアトリエ

毎日少しの時間でも土を触っていると、地球とつながっているという実感があります。自宅の前庭に広がる畑で野菜や染料植物を育て、その中で息づくすべての命と対話をしながら、生きる糧と作品を生み出す力を分けてもらっています。

四季折々に展開して行く自然の巧みな仕掛けや精緻な仕組みには目を見張るものがあり、私の制作の原点も興味が尽きないその姿を何とか手元に再現したいと、スケッチを重ねるところから始まりました。

型紙が彫れたらリビングと縁側が私のアトリエ、庭や森を抜けて来る風と太陽が手助けをしてくれます。

技法はごく古典的なもので、その道具や素材も古く

から使い継がれて来たものと全くかわりませんが、最近では型彫り用の刀、鹿の毛で作った大小の刷毛や型紙用の渋紙など、道具そのものを作る職人さんが減り入手するのも困難になって来ました。

少しずつ自然も変わって行く中で身近な形を型紙に起こし、無限につながり広がる型絵染めの面白さを追求して行きたいと思っています。



### 塩野 圭子(型絵染)

1954 年 東京都生まれ  
1977 年 多摩美術大学染織科卒業  
多摩美術大学染織研究室 副手  
※ '81 年まで  
1995 年 古村昌也・塩野圭子二人展(奥多摩)  
1997 年 「多摩平和いのち展」ボツリットホール(青梅) ※以降 06 年まで毎年  
2000 年 個展「塩野圭子型絵染展」ギャラリー蘭蔵(青梅) ※以後毎年  
2004 年 「小松茂夫・塩野圭子 二人展」ギャラリーいそがや(港区)  
2005 年 二人展「木のうつわと型絵染め展」ギャラリーさなぎや(福生)  
ワンダフル・ネイチャーランド青梅「野草と遊ぶナビゲーター、都立農林高校にて。  
以後小学校等での環境学習ワークショップ多数  
2014 年 個展「塩野圭子型絵染展」羽村市生涯学習センターゆとろぎ

# 前田 純平

## 無意識や偶然性と遊ぶリトグラフ

制作をしている時は、普段何となく持つ、もやもやとした不満・不安に形を持たせたいと感じています。

私は制作を始める時にとってもざっくりとしたプランしか作りません。

画面上で泥遊びのように絵の具で遊んでいるうちに何か見えてくるだろうという程度のものです。

そこから自分の予想しないかたちが生まれてきます。

作品には動物や植物や風景などが出てきます。

なぜその形が現れて来

たのかを考えて、整理するところまでが1セットの作品制作のプロセスになっています。

なので、すごく無意識と、偶然性に頼っているのですが、偶然性に頼っていることでコンセプトという大それたことのように感じますが、言葉にするなら予期しないものとの出会いや変化が私が制作することのポイントだと思います。



### 前田 純平(版画)

1983 年 鳥取県生まれ  
2007 年 「234」(文房堂ギャラリー/ 神田)  
2009 年 多摩美術大学版画専攻卒業  
第 76 回春陽展  
(国立新美術館 / 六本木)  
2011 年 前田純平・柳沢良 2 人展  
〜渦とマグマ〜  
(ギャラリー檜 plus/ 京橋)  
interactive-YOUTH-  
(ギャラリー檜 B・C/ 京橋)  
plus 展 part3  
(ギャラリー檜 plus/ 京橋)  
2012 年 interactive-YOUTH-  
(ギャラリー檜 B・C/ 京橋)  
第 1 回 FEI PRINT AWARD  
(FEI ART MUSEUM YOKOHAMA/ 横浜)  
個展 からっぽが満ちるところ  
(ギャラリー檜 plus/ 京橋)  
2013 年 ビエンナーレ OME 2013  
(青梅市立美術館 / 青梅)  
山陰の手仕事展  
(ギャラリー平左衛門 / 流山)  
青梅アート・ジャム「道具とあそぶ 素材であそぶ」(青梅市立美術館 / 青梅)  
2014 年 HANART(五條新町 / 奈良)  
MIND MAP(新宿眼科画廊 / 新宿)





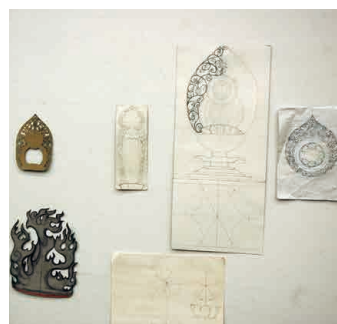
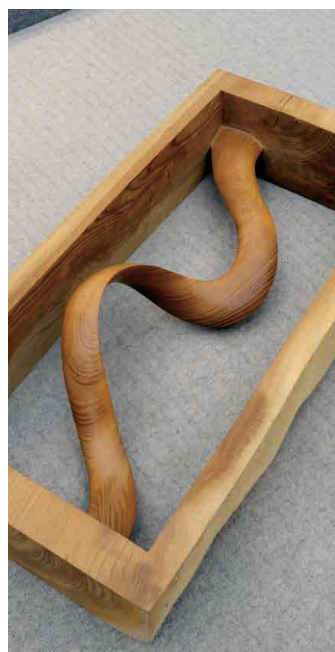
# 山口 幹也

## レトロな雰囲気を楽しむ制作の場

骨董市でバイトしていたこともあり、そこで得た家具や道具も使っているの、それら無くしてはアトリエの再現はしづらいつ感じていたため、単純ではありますが家具や道具、木材まで持ってきてアトリエと同じ間取りで配置しました。

時代を経たことで出てくる風合いや当時のデザインが、まるでベテランのアトリエかのような雰囲気を出してくれているので、受け継がれてきた物の影響を受けながら制作することができています。

作品の展示では、普段はアトリエの片隅に木の端材等と共に置かれていた学生の頃の作品も今やっている仏像彫刻と比べられるよう展示してみました。囲われた窮屈な空間に、辛抱強く形を彫り進める作業と、抽象的な表現を試みたことが、今の自分の作品においてどう表現するか、伝統的な仏像というものを現代の空間でどのように見せるか、ということに繋がりがあつたことを感じさせられるよう展示したつもりです。



### 山口 幹也(木彫)

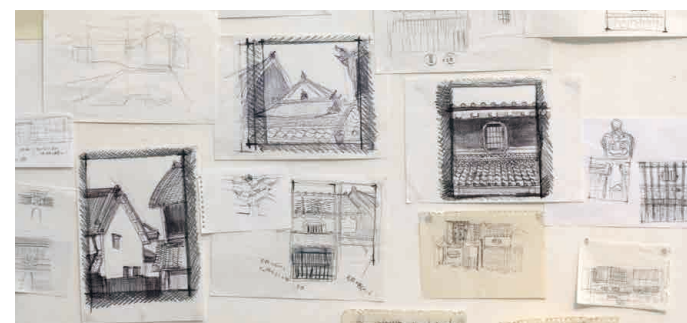
1973 年 東京都生まれ  
1999 年 金沢美術工芸大学 大学院修了、同年 伊藤光治郎氏に弟子入りし仏像彫刻を学ぶ。  
2007 年 深川不動堂にてグループ展に参加(同 2008 年)  
2009 年 第 13 回 日仏現代美術展で新作家賞を受賞  
2010 年 個展(吉野工芸の里 企画展) 石川県白山市  
2011 年 個展(ギャラリー悠玄 / 銀座 同 2014)  
2013 年 個展(パレットギャラリー / 麻布十番)  
2014 年 第 18 回日仏現代国際美術展で会員優賞受賞

# 杉本 洋

## 折り重なる記憶と歴史の断片

奈良県五條市にあるもうひとつのアトリエ「虫籠庵(むしこあん)」を再現したという本展示では、古の街並をテーマに制作されている一連の墨の仕事を展示しています。アトリエ「虫籠庵」のある新町通りには、日本最古の民家を含む江戸時代を

中心とした多くの建築が今も使われており、時代によって変化した様々な様式を見ることができます。この展示では、それらの街角のスケッチや取材の積み重ねが、新しい作品が生まれる基盤となる様子が伺えます。



### 杉本 洋(日本画)

1951 年 東京都生まれ  
1977 年 東京藝術大学大学院日本画科修了  
1989 年 出雲大社大分分祠神殿襖絵制作(堺市)  
1994 年 地藏院本堂天井画制作(あきる野市)  
1995 年 清岩院本堂襖絵制作(福生市)  
1999 年 京濱伏見稲荷神社参集殿壁画制作(川崎市)  
唐招提寺(奈良)「梵網会」団扇絵制作、以後毎年  
2004 年 文化庁文化交流使に指名される  
2008 年 東大寺二月堂修二会行法用紙手制作 以後毎年  
カナダ大使館 高円宮記念館「太平洋にかかる橋」展 出品  
2010 年 MISSA (Metchosin International summer school of the Arts)に参加  
2011 年 奈良・町屋の芸術祭「HANARAT はならあと」にて 個展 杉本洋作品展「大和路・五條から」  
現在 文化庁文化交流使、横浜美術大学講師、NPO 文化交流機構「円座」理事長  
個展 カナダ・ヴィクトリア美術館 ほか多数  
作品収蔵 秋篠宮家、国立司法研修所、長徳寺、光徳寺、宝蔵院、郷さくら美術館 他





## 第4回 東日本大震災義援展

2014年5月5日(月)～11日(日)  
会場: 青梅市立美術館 市民ギャラリー



5月5日～11日にかけて、祝日にも多く恵まれた本年の義援展が開催されました。

初日の午前に搬入、午後からスタートと少々慌ただしい始まりでしたが、昨年同様フェイスブック等での広報もあり、会期中 150 名以上の方に来場していただきました。参加協力してもらえた作家も 53 名と昨年よりも多く、会場の受付の当番までも手伝っていただけ、運営

する上で大変助けられました。

136 点の作品が販売されましたが、一点あたりの価格も控えめであった為か、義援金は前年よりも下回る結果となったとはいえ、¥316,000 の義援金が集まりました。

また、これまでの「東日本大震災義援展」で集まった義援金の総額は、¥1,976,600 円となりました。



## アート・ジャム in カナダ 2014

2014年8月8日(金)～16日(土) 会場: Eclectic Gallery, Victoria BC  
参加作家: 杉本 洋 (日本画)、長倉 陽一 (日本画)、前田 純平 (版画)

海を越えた作品展示の場を求め、カナダ ブリティッシュコロンビア州ビクトリアにて4度目の開催。期間中を通し来場者、現地アーティストとの言葉の壁を越えた交流が活発に行われました。

### 「素敵な一期一会」長倉 陽一

カナダでは Eclectic gallery にて、杉本先生、前田さん、長倉の3名で展示を行いました。

展示には日本が好きで絵を見に来てくれた方や、作家として活動している方、ギャラリーを経営している方、カナダ在住の日本人の方など沢山の方が絵を見に来てくれました。

前田さんが一足先に帰国した後、杉本先生と共にデモンストレーションを行いました。自分は来場者の似顔絵を描き、杉本先生は現地でスケッチに

行ったときに描いた滝の絵などを墨で描いていました。杉本先生の所には以前の展覧会の際に知り合った方たちなどが来て久しぶりの再会を果たしていたようです。その後にはカナダのTV局による取材があり、それぞれ作品の解説を行いました。

展示にもデモンストレーションにもたくさんの方に来ていただき、みなさん笑顔で絵を受け取ってくれました。

どの方との出会いも楽しく、素敵な一期一会となりました。

### 「現地アーティストとの出会い」前田 純平

私は今回の展示を通じて、アル・ウィリアムズさんという現地の画家に出会いました。その方の精神に深く共感できたことで、国や言葉の違いとは関係がない絵画の本質に改めて感じ入りました。

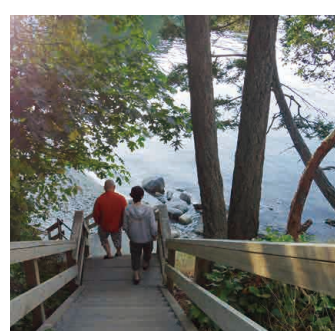
アルさんは 60 代。髪も髭も白く、よく冗談を言って笑います。私と同じ年の車に乗っています。(私は現在 31 歳) 同行の杉本氏と旧知である彼の自宅兼アトリエを訪問し、リビングにぐりと飾ってある作品を観てすぐに興味をひかれました。

柔らかく穏やかな彼が持つ、鋭い眼差し。曳き手がなく荷を積んだまま海を漂うコンテナや、打ち捨てられたゴムタイヤやチューブは、モノや情報が溢れる現代で、何が価値かを見失ってしまいそうな私(達)のように見えます。すぐに1点作品を購入することにしました。

作品として好きになったのはもちろん、出会いに形を持たせておきたかったから。今は私の仕事部屋で、コンテナは漂流し続けています。

### ー 紙面を借りて ー

現地アーティストのアル・ウィリアムズさん。ジェイソン・グロンディンさんと妻のリサさん、娘のアヤちゃん。抹茶カフェを営むシバタさんご夫妻とご家族の皆さん。私たちの為に素晴らしいパーティを開いてくれたロバート・エイモスさん。そして滞在中、ずっとお世話になった陶芸家の太田治美さんご家族の皆さんに、心よりお礼を申し上げます。







## ギャラリートーク「作家のアトリエ展」

2014 年 8 月 24 日 (日) 会場: 青梅市立美術館

**杉本 洋** (以下 杉本): 今日は暑  
い中皆さんお集まり頂きありが  
とうございます。「作家のアト  
リエ展」ギャラリートークを開催致  
します。出品作家は長倉君だ  
け欠席なのですが、他の皆さん  
は見えていますので、1階の  
入り口の作家の方から随時お  
話を聞き、上に上がって最終  
的にパネルトークを行いたいと  
思います。それでは今日の進行  
をして頂く勅使河原純先生、ど  
うぞ宜しくお願い致します。

**勅使河原 純** (以下 勅使河原):  
では改めまして、美術評論家  
の勅使河原です。宜しくお願い  
致します。  
最初は江見高志先生ですが、  
こうして拝見ただけで大学の  
立体研究室を思い起こさせま  
す。いつものアトリエの風景に  
ついて聞かれたらどんなもの  
を説明されますか？

**江見 高志** (以下 江見) はい、  
私は鑄造をやっているのです



が、鑄物場 (いものば) と、仕  
上げ場、ワックスがけの場を再  
現しています。

**勅使河原**: 粘土の造形と、石  
膏があって鑄物から針金が渡  
り合って木彫もあり、立体で手  
がけるべきことは全部揃ってい  
ますね。

**江見**: そうですね。道具も沢山  
あるのですが、現在使っている  
ものは持って来なくて、制作  
している場というのとは逆なん  
ですが、アトリエの中に過去の  
作品がわりと並んでいるので、  
その感じを出してみました。ブ  
ロンズや木彫も過去の作品で  
すね。こうしたアトリエ風景と  
して展示しています。

**勅使河原**: 年代としては木彫

の方が先にあってそこから金属  
という感じですか？

**江見**: はい、そうなりますね。  
これに石膏も加わります。

**勅使河原**: こうして見るとあの  
卵のような球体の作品と、こち  
らの黒い塊の作品がどうい  
うものなのか、すごく気になりま  
すね。

**江見**: 卵は石膏でブロンズに  
なる前の原形です。黒いもの  
は横浜のあざみ野で発表した  
作品なんです、色んな展開  
の仕方があり、ここではアトリエ  
の中で積み上げて保存してい



**江見**: はい、それはあり  
ます。  
**勅使河原**: 特にここで見てほ  
しいというものはありますか？  
**江見**: はい、青梅のケーブル  
テレビさんにもお話したん  
ですが、鑄物場に転がっている  
「湯道」(湯口から、鑄型の空  
所に溶解金属を流し込む水平

るという感じにしています。

**勅使河原**: これで完成では  
ないんですか？

**江見**: はい、まだ一部です。  
これが全部床に展開されまして、  
上に乗っかっているブロンズの  
板に色んな形で乗っています。

**勅使河原**: こうしてインスレー  
ション的に床に広げて完成な  
んですね。

**江見**: こうい形にしてみたかつ  
たというもあります。

**勅使河原**: これから、ここでこ  
うい風に見えたからま  
た作品が新たに作れ  
るという

こともあ  
りますね。

**江見**: はい、それはあり  
ます。

**勅使河原**: 特にここで見てほ  
しいというものはありますか？

**江見**: はい、青梅のケーブル  
テレビさんにもお話したん  
ですが、鑄物場に転がっている  
「湯道」(湯口から、鑄型の空  
所に溶解金属を流し込む水平



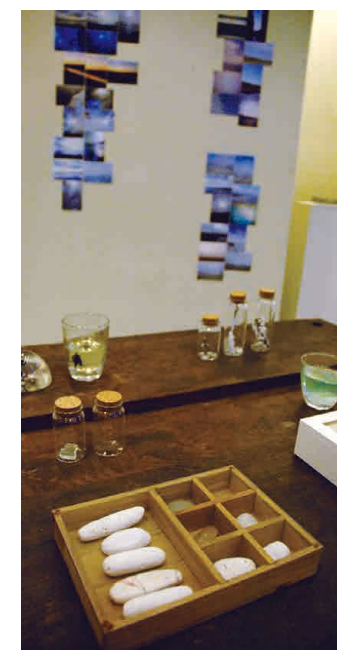
の通路) ですね。これは鑄物  
場でないと中々手に入らないも  
のですから、作家の中でも彫  
刻をやっていないければ作れな  
いし、偶然というか、私の工房  
にはゴロゴロしていますね。

**勅使河原**: ちなみにこれを  
作ったときにはどんなものが  
出来上がったんですか？

**江見**: ここにある木彫ですね。  
同時進行で制作しました。

**勅使河原**: はい、ありがとうご  
ざいます。それでは次の大川  
さんのところへ行きましょうね。  
最近はデジタル化でフィルムの  
一コマコマを目にすることが  
なくなったんですが、大川さん  
の作品を見ればそれが本当に  
出ていますね。

**大川 真実子** (以下 大川):  
はい、学生の頃は現像も自分



でやっていました。元々写真を  
使ってインスタレーションの作  
品を作っていましたが、最近  
はあまりできていなくて、これら  
も自分で現像したものではない  
ですね。

**勅使河原**: コマ落ちて、色  
んな素材も集めてそういうも  
ので一つの作品を作りたいつ  
てことですか？

**大川**: 今回この展示で、私は自  
宅のリビングで作っているの  
で、わかりやすくアトリエとい  
う風にならなかったもので、考  
えた末、インスタレーションの  
もとになる写真やドローイング  
を集めました。この辺にある細  
かい作品や石とかも特に作品  
という位置づけではなく、趣味  
で拾ってきたもので、作品に  
しようというよりはドローイン  
グの延長のような形で自分の  
好きな物を集めたり、試みに  
作ったりしたものを展示して  
います。

**勅使河原**: 拝見していて、非  
常に面白いなと思ったのは、  
これらが絵になっても瞬間瞬  
間にとらえてそれが繋がったり  
しているという発想が「ああ」  
ってなるところですね。

**大川**: インスタレーションの作  
品を作るときも、記憶の断片  
等を表現したいとか、そうい  
うことを思いながらやってい  
ます。これらも最初から繋げ  
ようと思って描いたわけなく、  
写真等もそうなんですがたま  
ま写真を撮った時期や場所等  
から、関連性のあるようなもの

を集めたり、ドローイングも学  
生のときのもの等もあってバラ  
バラなんです、自分で改めて  
見てみると、関係や繋がり  
のあるものだったりして、今  
回展示しながら見つけて置く  
という感じでしたね。

**勅使河原**: こういう作品が  
出始めたときは、すぐユニーク  
な発想だと思ったのですが、  
段々見慣れていくうちに「人間  
はこういうのが自然なんだ」  
と思うようになりましたね。  
当たり前に見るのは断片断片で、  
一つの作品に全然違う作品を  
集合するような発想をしている  
んだと、ということが自然なん  
で、若い人が自然に全部こ  
ちに行っちゃうという感じを  
今受けています。というところ  
からまた新たな何かが見えて  
来ると感じを受けます。  
人間が結晶したみたいに凝  
縮していますが、そういう点  
でも何か言いたいことはあり  
ますか？

**大川**: モチーフとかのこと  
ですか？モチーフは大体風景  
とか夢で見たことを描くことが  
あります。

**勅使河原**: 風景は具体的に  
出てこないですが、人間はず  
ごくかちっと出ている気がしま  
したね。  
ありがとうございました。では  
次に行きましょう。

**勅使河原**: こちらが鈴木ひろ

みさんのコーナーですね。

**鈴木 ひろみ** (以下 鈴木):  
はい、木版画を制作してい  
ます。木版画という浮世絵を  
思い浮かべるかと思いますが、  
浮世絵の技法も使っていて、  
こちらが作業している風景  
と、作ってある木版の版木  
です。浮世絵の道具「ばれん」  
を使って手で刷っています。  
これプラス変わった技法を足  
して、こちらは銅版画で使わ  
れる「凹版刷り」という作業  
です。彫ったところの溝にイン  
クを詰めて、銅版画用のプレ  
ス機で刷るという作業を二つ  
重ねて、作品を作っています。

作業は自宅で行っていて、こ  
れは美術館からお借りした  
プレス機です。プレス機は重  
いので家の中で使うと床が凹  
んでしまうため、自宅の外  
の倉庫を改装して、そこに  
置いて作業をしています。

主に風景や、日常のちよつ  
とした所から「きれいだな」  
とか「懐かしいな」と思っ  
て絵にしたいことを絵に  
しています。見つけた風景は  
写真に撮っておいてコルク  
ボードにば一つと貼ったり、  
散らかして絵







にして、それをこういった感じに版に写す、というようにして作っています。

**勅使河原**：鈴木さんのお年だと、我々の少年時代とは全然違う生活を送っている筈なのに、我々の目から見てそんなに「懐かしいな」と思われますね。

**鈴木**：はい、結構若い人はビビットな色を使いますが、私はそういう色があまり好きじゃなく、少しくすんだ色に魅力を感じています。木版の色は水干絵の具を使っていて明るいのですが、それを敢えて凹版刷りで一回木目を付けて、くすませています。

**勅使河原**：独特の色遣いが、懐かしさや親しみやすさを作っているんですね。でもそうするとくすんだ色が重なり合ってどんな効果になるかわからないというのがあると思いますが？

**鈴木**：はい、版画は何がどうなるかわからないという面白さがあり、重ねると思った色と違ってくるといふのもこの技法の面白い所だと思いますね。

**勅使河原**：版画を教えている所など拝見すると、「また色がくすんでる」と怒る所がありますが、それに対してくすみを掴んでいて、雲を一つ切り取っても作品になるという所がすごくいいですね。

**鈴木**：はい、雲とかも描いています。

**勅使河原**：遠近感もしっかり強調されていますね。これはこういう技法のせいですか？ 通常の木版では出ない線が出ていますが？

**鈴木**：そうですね。やはり彫刻刀で彫った線だと描いた線とは全く違います。

アトリエじゃなくて作品の話になってしまいましたね。(笑)

**勅使河原**：若い女性の作品なら、線は手描きでやれば済んでしまう所を、全然違う描き方に出ているんですね。すごく面白いです。

**鈴木**：では、続きは質疑応答で。(笑)

**勅使河原**：次は池田さんですね。

**池田 菜摘** (以下 池田)：はい、私は主に自宅の部屋で制作していて、部屋の床に絵の具がこぼれないように敷物をしいて、床に座って作業しています。このぬいぐるみやおもちゃは、モチーフに使う小道具で、熊のぬいぐるみは作品と同じポーズをとらせています。部屋での作業がほとんどですが、水彩色鉛筆とスケッチブックを持って戸外に出ることもあります。花や風景のスケッチは、近所に大きな公園があって、そこでスケッチや写真を撮って、作品のもとにしています。動物園に行くこともあります。基本アトリエと呼ぶ所は部屋ですが、スケッ

チブックと色鉛筆さえあれば、どこでもアトリエになるというのが私の考え方で。

**勅使河原**：新聞紙やぬいぐるみがあって、洗濯の道具があって、完備した再現ですね。(笑)

**池田**：はい、筆や雑巾を洗ったときにこの物干しでいつも干しているの、それを再現しました。

**勅使河原**：多分、池田さんの気取らない日常の制作場が切り取られているのですね。観客の皆さんはおそらくこの中に何かユニークなものがあるかと探しているかと思うのですが、実は無いんですね。美術に繋がりのようなものは無い。そこまで気取らない日常から生み出された作品に何か価値があるのかというと、とりあえずその価値もあまり感じられないんですよ。そうすると一体これはなんなのか。という謎が出てくるんですが、今「メディア・アート」という言葉が世の中に流布していて、要するに作品は制作場含めて完成した美術品ではない、これが世の中に流れ出たって、皆さんと混合しながらやがてできていきつかけになるんじゃないか、という。そういう意味ではこの展覧会会場の中で一番哲学的な作品だと思いますね。私は今メディア・ア

トに心がなびいているんですが、今はこういうものが主流なんだと、ここから何かを出してするのは池田さんではなくて、むしろ皆さんの側なんだという感じがしています。

何か反論はありますか？ (笑)

**池田**：えーと…難しいですね。(笑)

**勅使河原**：インスタレーションの発展系が池田さんだと私は思います。では次に行きましょう。

長倉さんは欠席ですので、身代わりと言ってはなんですが…

**杉本**：彼は一応、技法としては日本画をベースにして制作していて、絵の特徴としては漢字を象形化や単純化して描いたり、字の意味等を重ね合わせてこしらえていくといった制作過程を経ています。

**勅使河原**：拝見して、この辺の絵もすごく謎めいていていいなと思ったんですが、更に更に、この漢字にすごく心惹かれました。



た。しかも漢字だけでなく、読めない字だったりサンスクリット語みたいのであったり、ものすごく謎めいた字なんですよ。この方はおそらく字というものに特別な感情やハイパーテクノロジーを感じているんだと思います。それが彼の造形の中にも込められている筈なので、長倉さんの口から直接そういうことを聞きたかったのですが、私は何となくそんなことを感じます。では次に行きましょう。

**勅使河原**：永島さんですね。まずは先入観なしにお話しを聞かせて下さい。

**永島 貴幸** (以下 永島)：はい、僕の場合はイラストなので、他の方とは毛色が違うというか、特殊なんですけれども、元々こういう絵柄を描くようになったのは数年前で、コミックイラストというものをそれまで描いていたのですが、段々と自分の中で変化があって、自分の中で何もなくなってきたときに段々とイラストの方に発展していった、自分の中にある可愛いものを表現したくて描き始めました。



**勅使河原**：イラストだと、当然目的があったり、クライアントがいたりする訳ですが、こうやって美術館の壁で何気なく展示していくと、段々そういうのが消えて、自分の作品になっていくような感じではありませんか？

**永島**：そうですね。やっぱり専門学校ではクライアントの要望に合わせて絵とかの授業内容もあって、それに添って描いたりもしたのですが、元々は作品を作りたくてやっているの、最初に自分で毛色が違うと言いましたが、最終的には媒体に合わせたイラストというような作品を作っているという感覚が多いですね。この辺りとか…。

**勅使河原**：この空の作品と、少女が野原に座っている作品、この二つが突出して気合いが入っていると思うんですが、これで負けたらイラストレーターとしてやっていられない! というような感じを受けるのですが？

**永島**：そうですね。今回は作家のアトリエ展ということなので、作業風景を展示する中で、描きかけという感じで描いて、尚且つひとつの絵の中で描き込みを多くしているものと、ラフにちょこっと絵の具を置いてだけみたいな、日頃の作業密度の差というのをこの中で表現しようと思ったので、こちらの絵は左下の方に特に筆を入れていて、左上はあまり筆を置かない、というようにしています。

海の方は突発的に海が描きた



くなったので、気合いは入っていたかもしれないですね。(笑)

**勅使河原**：そういうのを耳にした後ですが、細部も含めて、しっかり構成できていると思います。後は何かありますか？

**永島**：僕の場合は自宅の机の上が作業スペースなので、机の上はこのまんまという訳ではないですが、イメージ的にはこういうゴチャゴチャした感じで、そういう生に近いようなスペースを見てもらえたらと思います。

**伊藤 光次郎** (以下 伊藤)：作家というのはあまりアトリエを公開しません。手の内を見せるような感じになるので。私は木彫という世界をやっております。こちらにあるのは創作的なもの、こちらにあるのは仏像です。その二つに大まかに分かれます。

創作の方はトルソだとか作っていました。今は色を付けたり、日本画の岩絵の具を使うミクストメディアに近い、いろんな素材を使っています。仕事場はもっと広いです。彫刻はスペースが必要ですね。ちょっとこれは狭いです。広いところにいけば、また物作っていっぱいなる。その繰り返しでやっています。

**勅使河原**：これだけの作品を並べて頂けたので、伊藤先生の制作の秘密が見られますね。

**伊藤**：秘密というか、アトリエとは濃密なところですよ。住

まいと違った空間のものですから。その中から自分が何を表現するか、引き出してくる。引き出して来やすい場を作っていくというのが、アトリエ、仕事場というものになるのではないかと。

**勅使河原**：仏像のことでお聞きしたいのですが、普通の仏像かなと思う作品から、引き伸ばしたような、ジャコメッティのような、このような作品がありますが、段々そちらに発展してきている？

**伊藤**：お互いにクロスし始めていますね。仏像とは元々お寺や個人が持って礼拝するもの、象徴としてあるものです。それから少しずつ離れていく、行きつつある状態ですね。

**勅使河原**：クロスということは、一直線で抽象の方へ向かうんじゃない、行ったり来たりする？

**伊藤**：行ったり来たりです。仏像にも抽象的な要素を取り入れたり、抽象的な作品にも仏教的な要素を取り入れたり。

**勅使河原**：絵の方もあります、拝見すると、伊藤作品の中で彩色の占める役割は相当大きい？





**伊藤**：そうですね。最近、識閥（しきいき）というものに興味がある。意識と無意識の境目のところ、それがどうしても気になるんですよ。ところが、木彫は刃物を使いますから完全に集中しないと作れない。ところが絵というものは、途中で集中しなくてもぼんと色を置ける。それが識閥というものじゃないかなと。そういう感覚で色を付け始めた。物の形を作るのはそっぽ向いてはできない。ところが色はできますね。

**勅使河原**：絵の方が自由度が高いでしょうか？

**伊藤**：粘土はできるかもしれませんが、木というのはできない。彫刻刀を使うわけだから集中しないと。

**勅使河原**：もう一つ、テーブルが二つありますが、高いのと低いのが、意味があるんでしょうか？

**伊藤**：仏像は細かいものだから座ってやります。大きいものだと等身大くらいの作品になると立ってやります。最近は歳とってきたのか座ってやるのが楽なので、多いです。

**勅使河原**：最後にしゃれこうべ

があそこにあるのは？

**伊藤**：あれは去年中国行ったやつが買ってきてくれたんです。すごい安かったって。頭蓋骨をさわっていると気持ちいいんですよ（笑）。私も顔を作りますから、常に見てなきゃいけない。その象徴として置いてあるようなものなんです。

**勅使河原**：現場はこんなもんじゃないと噂を聞いてますが、今までと違った姿が見れて非常に面白いです。

**鈴木 寿一**（以下 鈴木）：陶芸の話をする、大地がアトリエというような感じで、何も無い時代から陶芸はありました。時代が現代に近づく、と部屋で作るようになって、電気なんか普及してくるとどんどんコンパクトに作業できるようになりました。今だったらマンションの一室で陶芸教室があったり。僕の実際のアトリエだと、轆轤（ろくろ）を回している部屋は八畳の部屋でそれ以外に窯があったり、粘土があったりします。今回スペースが八畳以上あるので、普段より間延びした感じ。棚の上にも作品があったり、この上にも作品を並べようかと思ったらそれはここでは止めてくれと言われたので、上の空間は飾のを止めて。あとは生の粘土が陶芸の場合はずいぶんあるのですが、それが素材なので。アトリエの中

で自分にとって気持ちいいエアコンのある空間は、粘土にとってはあまりよくないです。梅雨時だったり蒸し暑い方が、粘土には良いです。冬もストーブもあまり好ましくない。逆に粘土が凍ってしまうのもよくない。自分のコンディションとは別に粘土にとっての環境を考えながら、狭いスペースで普段仕事をしています。

**勅使河原**：鈴木さん作品でこの白い釉薬というか、この効果はどっから来るのか気になるんだけど、それはこの展示の中で秘密が明かされていることはないですね？

**鈴木**：こちらに普段使っている材料を並べてみたんですが、全部持ってきちゃうと一ヶ月仕事ができないので、炭酸バリウム？ だとか鉱物なんかを。全部名前を取ってしまえば、同じような白い粉で、だしばなしにしておくと、これなんだっけな〜とわからなくなってしまうこともあるくらい。それを割合を変えて、配合を変えていきながらイメージとあった色になるように実験をしてこしらえている。これは常に制作と並行して作品を焼いている横には次の作品に向けての実験のためのテストピースがあって実験を繰り返しています。

**勅使河原**：釉薬の下の形が指あとかな、線が見えるものがある。これは轆轤と関わりがあるんですか？



**鈴木**：轆轤目といって指あとが出ています。削ってなくしてしまう方も多いですが、僕は残っていた方が、シンメトリーじゃなく、螺旋に回ってますから、左右で形が変わっていて、シンメトリーにするよりも少し動きが出て僕は残しています。

**勅使河原**：それが鈴木さんの人間性というか、暖かさが作品に乗り移っていると思います。

**阿部 静**（以下 阿部）：私は普段インスタレーションという形で作品発表しています。アトリエでは実際の作品を作ることは殆どなく、現場での制作ありません。なのでアトリエではドローイングやスケッチなどの現場制作の前段階の作業をしています。また、木材を使うことが多いので、アトリエで基礎を作って現場に持って行って、空間とのやり取りで制作しています。あともう一つ、フィールドワークが多くて、今回も一昨日まで3週間バイクツーリングしてきました。そういった現場で得られたことをもとに作品化させているのです。今回はアトリエの

ドワークの中に物語がありますね。非常に面白いです。最近の若い人にどんなモノづくりをしていますか？ その次に、形があるものを作っていますか？と聞くんです。そうするとば一つと答えが跳ね返って来たりする。

**塩野 圭子**（以下 塩野）：先ほど伊藤さんがアトリエは生活と区切られた別の空間、とおっしゃっていたのですが、私の場合はまさに生活の中と同一の空間です。リビングルームの前に庭があって、いろいろな植物を育てて、そういう中の生き物の姿という形というのを切り取って表現したいと考えています。順番から言うと、実物があって、デッサンして、デザインして、型紙を彫って、リビングでやるんですが、板に布貼って、縁側に張って、型紙置いて、糊置いて、しんしゅ張り？ というんですけど、糊を置いて地染めしている状態の途中なんですけど、これを縁側に2本3本貼って、大きい刷毛を使って着物を染めるように、地染めをし



ます。それを何度も何度も十何回、染めては重ねて、最後に、ロケットみたいな形のものがあるんですけど、染めた後に蒸気で蒸す工程の筒です。ガス台の上にこれを乗せて、中に生地を巻いて入れて一時間近く

蒸します。そういうかなりたくさん工程を経て作品になります。最終的に水で糊を洗い落す。最終的に水で糊を洗い落とす作品ができます。モチーフにしても身近な庭の植物だったり、目の前にいるニワトリだったり、小さい生き物だったりですね、私は生きることそのものと表現が一致している。

**勅使河原**：作家のアトリエで型紙が脅威的ですね、作家にしたらなんでもないけど、この型紙がこれになるの？ という驚きがありますよ。三角形のものが円になるじゃないですか。型紙の方が面白いとも感じてしまうんですね

**塩野**：型紙の良さで、何度も繰り返し使えるし、エンドレスで繋げていける。丸くすることもできる。そういう発想ですね、万華鏡シリーズと呼んで鏡文字のように裏表という風にデザインしてやっています。アレンジの仕方によっていろいろな姿に変えられる面白さがあります。

**勅使河原**：だまし絵ではないんだけど、違う方向に持っていくのか、どこが繋がっているのか当てて見ながら楽しんで頂ければと思います。

だけど、面白いと思いました。ウィリアム・モリスがやっている工業化されたデザインと塩野さんのデザイン、似ているんだけど、どこか違いますね。

**塩野**：ひたすら手仕事ですからね。

**勅使河原**：緻密な絵もありますね。

**塩野**：最初にここまで描きこみます。緻密に見てみないと美しさはわからない。細密に描きこんだ上でデザインします。

**勅使河原**：これの元にはこちらがあるということですね。

**塩野**：型紙って切り落とすか残すかの面なんですね。切り絵と同じような感じなんですけど、常に、デッサンするときもどう型紙に落とそうか、どっかで考えながらしてますね。

**勅使河原**：性格的に大胆というか思い切りがないとできませんね。

**塩野**：型紙と作品を見比べて、これを使ってこの作品ができていくというのがわかってもらえるかと、どこが繋がっているのか当てて見ながら楽しんで頂ければと思います。

**前田 純平**（以下 前田）：僕自身はアトリエと呼べるものをまだ持っていないくて、4.5 畳の部屋にリトグラフのプレス機が置いてあるのですが、それはまだ使える状態になってなくて。町田市にある版画工房で主に







制作をしています。描画するのは家でやり、版画工房で刷っています。部屋の地べたで描いたりとか狭いスペースに版を立てかけて、描いています。今回は床に散らばってるような、普段は展示しない失敗している刷り等も展示しています。合わせて制作過程で使ってる道具、素材、僕も型紙というのを使ってまして、そういったものを展示しています。

**勅使河原**：リトグラフはそんなに珍しい技法じゃなくて、木版の後にできて写真の前に繋がる歴史的背景がありますけど、この作品は非常にユニークですね、いわゆる筆とか、ドローイングを使っていない。

**前田**：今はまったく使ってないですね。使っているものはまず、業務用コピー機のコピーナーと、ホームセンターで売っている黒いラッカースプレー、ほぼそれだけです。

あとは型紙で形を作るんですけど、描画はほぼそれだけです。

**勅使河原**：たぶん前田さんはすごくデッサン力があって、テク

ニシャンなんで逆にそれを見せたくない、あるいはそこに偶然性を取り込みたいというような考えがあってされているんだろうなと推測するんだけど、その結果が古代の壁画に繋がってるんだよね。

**前田**：ラスコーの壁画とか、自分ではあまりそこと繋がってなかったんですけど、実は今勅使河原さんがおっしゃったように、偶然性に任せるというのはその通りです。

僕の制作過程としては、この薄い墨部分をコピーナーで作って、それから見えてきた形を拾ってきます。なのではじめには形を意識していなくて途中からは形を拾い出していく。偶然性、無意識の自分の形が出てくるのが楽しみで作っているところがあります。これは大学時はあまりしていなくて、卒業した後にやり始めました。

形を決めてこのやり方でやってみたこともあるんですけど、偶然性に任せてやった方が引き際が潔くなって。

**勅使河原**：自分一人で作り上げきれない、潔く引くというように、それが作品に広がりを出してる。なんで壁画を思い立ったかという、洞窟壁画は手形を残すんですよ。上からカーボンを吹き付けて。

3万年くらい前の作者の手形。手形がこれにあるんです。先例があるなと思って、墨が主体の表現だと強調されるね。

これからずっとリトグラフを続ける？

**前田**：家にプレス機があるので、もっと活用しないと、と思っています。

普段は違う仕事をしていて、今は日曜アーティストみたいな感じなんですけど、家で刷れるようになったらもっとコンスタントに作れると思います。

**勅使河原**：伝統木版をやる人は多いし、写真は殆どの人が手掛けるようなメディアになってきたんだけど、リトグラフは抜けているんですよ。専門に追っかけてる作家があまりいない。非常に有望ですよ。

**山口 幹也**（以下 山口）：アトリエをそのまま単純に持ってきたという感じで。学生の時は、骨董市でバイトしてそこで買ったものもらった物持ってきて、道具も持ってきてます。

**勅使河原**：山口さんは本家で再現していて、1番アトリエを生で持って来られたんじゃないかと。山口さんの仏像を拝見して、木の美しさが際立つんだよね。前から思っていたんですけど、どうやって節目の無い木を選ぶのか分からないのだけど、そういう所にも神経がちゃんと行き届いている。無意識的に個々に気が木の素材その物が並べてある。この辺も綺麗な木がお好きなんじゃないかとわかります。

**山口**：本当にアトリエの一角にこうやって置いてありますね。

**勅使河原**：木の臭いがお好きなんですか？

**山口**：そうですね。まあ、すべてですね。

**勅使河原**：素材とこれくらい親密にお付き合いしないと仏様は彫れないんだな。

**山口**：わざわざ山に行って自分で切りだしたり、板材にした木を多少でも捨てるのがもったいなくて、こういった形で、何かしら利用できますんで。ここまでは手間かけたものをなかなか捨てられない。ずっと置いてあるんですよ。

**勅使河原**：この木の彫り方、寄木にしてしまったら一瞬で作れるじゃない？それを全部掘り出すんでしょう？それはすこいよね。

**山口**：これは学生の時の作品ですけど、囲われた空間の中に物を彫るというような仕事が好きだったので、そういう作業



を続けてました。

**勅使河原**：作家にも飽きっぽい人とか、粘り強い人とか、閃きが鋭い人とか、タイプがいますが、執着心がない。私は感じられました。これからは主たる作品は仏様ですか？仏様の魅力は一言でどんなところですか？

**山口**：一言じゃとても表せない。前から思っているんですけ

ど、仏様にはちゃんとした様式があって、台座光背とかきちんと作らないといけないですけど、お寺以外のところでどう見せられるか、というところで作っていきたい、作り続けたいです。

**勅使河原**：雲中供養菩薩みたいなものがありますよね、平等院あるのは雲は小さいじゃない？なんであの雲は小さいんだろうと前から不思議に思っていたのですが、山口さんの作品はちゃんと乗り物風に置き換えてあって安心しました。壁には光背の図面もあって。

**山口**：光背は図面にして、型紙みたいに、木に貼り付けて彫ってますね。

**杉本洋**（以下 杉本）：日本画ですけど、今回は墨の仕事を spaces の再現ですね。

**勅使河原**：かなり忠実な再現ですか？

**杉本**：それ程でもないですけど、青梅と奈良の2か所に仕事場があるんですが、奈良の方の再現ですね。スケッチを貼っていて、その時描いているものの関係のあるものしか部屋に置かないようにしています。前に描いた作品はすべて片づけてしまいます。スケッチしたもののパーツを構成したり、それぞれのイメージを下絵に移して、墨に起こしていく、そういう作業です。

**勅使河原**：デッサンなんかがあることで、今立ち向かってる主題が入れ変わり頭の中も変わると。

**杉本**：そうですね。すべて総取り替えます。

**勅使河原**：建築の方、しみじみ感じるんですけど、田舎の美しさと小路に対して独特の思い入れがあるんじゃないかと？

**杉本**：歩いてると、そういう物が気になり目に入ってくるということと、これは江戸期の通りを、自分の中で再構成して気に入った部分のパーツだけで構成して作り上げています。これはまだ完成したわけじゃなくて、まだ続く予定なんですけど。

**勅使河原**：フランスのパスサージュ？が、いろんな要素が取り込まれながら、中間的な曖昧な場所、と理解しているんですけど、日本の江戸の街並みにも感じられる。

**杉本**：特にこの場合は商家って町屋の佇まいなので、似たところがあるかもしれないですね。武家の町は戦略的な作りになっている。袋小路になったり曲がり角があったり、すぐ行けないようになっていたりしますが、ここの場合は合理的であったり、小路の中に工夫していろんなものが配慮しながら作られているようです。

**勅使河原**：あと私がこのアトリエで感じるのは、この量。量の上に座って描かれる？

**杉本**：そうですね。実際はこの3倍位の大きさで大きい紙



の作品なんかを描くことがあります。この畳自体はホームセンターで買ってきました。(笑)

**勅使河原**：それが、カエルの目線というと申し訳ないけど、独特の建築の捉え方と繋がっている。仰ぎ見る視線というか、普通の建築の見方とちよつと違う。俯瞰的でない。おそらくこの台の高さとか、反映しているんじゃないかと。

**杉本**：取材している時は地面に直に座ったり、脚立を2種類くらい持って行って、脚立の上でスケッチして目線を変たりするんです。描くときはこの姿勢で描いてますけど。物によっては上から見てるスケッチもあります。

**勅使河原**：取材の仕方によって独特の日本の家屋の顔が浮かび上がってくるんですね。

**杉本**：虫窓窓（むしこまど）ひとつとっても、屋根の形状、瓦の形状で時代がわかるとか、描いていくうちにわかってくる。江戸期でも早い方の建築とか、幕末のころだとか、これは明治、大正だよとか。

**勅使河原**：杉本先生の場合はいろんなところに制作の拠点箇所ある。2か所ですか。場所によって作品が違うことがあるんですか？

**杉本**：そうではないと思うんですけど、この作品は住んでいる前の通りの風景ですけど場所によってはやはり影響を受けますね。



**勅使河原**：青梅ではこういう風景は描けないでしょうか？

**杉本**：青梅も無くなってしまいましたね。青梅宿にも何件かは残っているんですけど。奈良の五條は沢山残っていますから。江戸時代だけで88件で、明治大正だと100件どころじゃない家がずっと並んでいる。

**勅使河原**：そういうものが杉本先生を引き寄せている。

**杉本**：そうですね。今回はこういうモノトーンの作品展示でのアトリエ再現ですが、青梅のアトリエは絵の具ビンがありますので、もっとカラフルで賑やかな仕事場です。

**勅使河原**：アトリエは作家にとって企業秘密な部分もあるけど、傍から見てると、ああ、ここで新しい絵が生まれるのだと思うととても楽しい。





**勅使河原**：ここからはみなさん、お座り頂いて。先ほどから作家のみなさんは怖い質問きたらどうしようと怯えてましたけど、それをさらに上に行くような質問を是非お願いします。

**来場者女性**：江見さんの作品の説明で湯道（ゆみち）というのはなんですか？素人では意味がわからないのですけれど。

**江見**：湯というのはですね、ブロンズが溶けた状態、さらさらで真っ赤というか黄色なんですけど、それが水のような状態のことを、「湯」と言います。それが鋳型の中に流れていくように作ってあるんです。作品に流れていく。それを「湯道」といいます。

**来場者女性**：ではあれは自然にできた造形？

**江見**：そうです。作ろうとして作っ



たのではなくて、作品を鋳造するためのものです。溶接はしてありますが。

**勅使河原**：その鋳造の事で、脇から一言申し上げたいんだけど、湯は何度くらい？

**江見**：1050 度～1200 度くらい、ブロンズの場合ですけどね。鉄の場合ですと1600 度くらいまで上げます。

**来場者女性**：火傷することはないですか？

**江見**：あります、あります。(笑)

**勅使河原**：柄杓いっぱい、バケツいっぱい1200 度でしょ？完全に命がけの仕事ですよ。

**江見**：はい。降ってくることもあり、よく鋳物場で爆発することありますよね。あれは溶けたものに、まだまだ温まってない銅ですとか鉄を放り

入りますからね。よく鋳物場で爆発することありますよね。あれは溶けたものに、まだまだ温まってない銅ですとか鉄を放り込んで空洞になります。たとえば銅像を作る場合は、湯道の先が厚さ5 ミリくらいの空洞になっている、そこに流し込むんです。**来場者女性**：鋳型を作るのも

大変ですよね。

**江見**：鋳物というのは粘土から始まって、型を反転していくんです。粘土、石膏、シリコン、鋳型、ブロンズ、と最低でも5 回やりますから。大変な手作業ですね。アトリエも当然ものであふれてしまうんですよ。できれば美術館くらいの広さが欲しいんです(笑)。あと作品ね。

原型、鋳型、シリコン型と、どんどん溜まっていくんです。最初はわずか100 万円くらいの資金で仕事場を作った。でもすぐ

にいっぱい。また別のところに移った。できれば美術館とは言いませんが倉庫が欲しいですね。学生時代の作品は全部ほとんど捨てましたね。何度も引っ越したので。

**伊藤**：倉庫ほしいね。木彫はその点楽だよ、ストーブで燃やせばいいから。(笑)

**勅使河原**：作家の方に言いたいのですが、ご自分の旧作絶対に捨てないで頂きたいですね。

**伊藤**：場所もあるけど、自分の旧作どうしても嫌なんだよね。

**杉本**：旧作は3 分の2 は無いだろうね。

**伊藤**：鈴木くんのは良いよね、壊してまた作り直せるでしょ？

**鈴木(寿)**：買ってもらった作品に、20 年ぶりに再会したりとかそういうパターンもありますね。でも作った時に半分くらいは壊してしまう。

**塩野**：私は場所とりませんからね。布なので、薄いし軽いし、丸められて小さくなるので。学生時代からの型紙もあります。型紙があれば作れるし、アレンジできるので。

**江見**：理想は何も持たないでノミー一本持って出かけていきたい。

**伊藤**：円空みたいに？

**江見**：はい。それが理想なんです。でもどんどん増えてしまっ

て。どうにもならない。**伊藤**：でも円空はノミー一本じゃなかったみたいだよ。10 本くらい持っていたって。でもどうしたってものは増える。道具なしではできない。

**勅使河原**：木彫の方向何人かいらっしゃるけど、今の時代に対して効率が悪いと言うか、時間かかるし、できたものは小さいし。でも敢えて木彫を手から離さないというのは、どうしてなのでしょう？

**伊藤**：ある程度いろいろやっただけです。最終的にやっぱり木だった。石は目に入ると痛くて痛くて。イサム・ノグチは目に入っても痛くないって言うんだよね。愛おしくい



た。ブロンズは熱いから嫌だし、木はぶつかっても痛くない。木を噛んで、臭いを嗅ぐのも好きだったから。そういう自分の性格に合うものを選んでいくじゃないのかな。効率も悪いが、材料もなくなってますね。

**勅使河原**：ある作家さんが、女子学生に得体がしれないと言われてる。表現となるとある種の限界を超えて突っ込んでいかないといけないから、世間からたびたび奇人変人と呼ばれる可能性はありますね。

**伊藤**：私は弟子に入ってから晩まで制作していた。それだけでもプロになれない。そこからもう2 段、3 段伸びないとプロにはなれない。弟子に入ってからわかりました。

**勅使河原**：弟子というのがあったけど、今は伝承という機能が弱まってきている。いわゆる美大とか学校全体の伝承も困っちゃってますね。根本的にいくと、観るという機能が壊れてきているんじゃないかと。塩野先生の作品に鶏がいますが、鶏の足が何本か答えられる大学生が4 割しかいない。確実にそういう時代が来ている。それに対して美術家はどう立ち向かったら良いか。

**伊藤**：まあ、でもやりたいことは変えられませんからね。人が見ているから、確かに表現は見る人がいての表現だと思えますけど、それだけじゃなくて自分が納得したい、自分が見て

みたい。そういう所がある。これが売れていくということじゃなくて、この先がどうなっているのか、どうなっていくのか、開示していく。そういうのが作家の人たちであるんじゃないかと思うんですね。そういうのをできる人が残っていく。

**江見**：この地域ですと、自然があるので見る機会もあるでしょうけど。鶏の足も。

**勅使河原**：青梅で子供時代を過ごすと、魚とったり、トンボとったりできる？

**伊藤**：娘が成木の奥の方の小学校ですけど、一クラス5 人だけ。先生がいい先生で教室の外に出て自然観察をさせたりしいんです。そういうことで物を見る目が良くなって、日本画やっているわけなんですけど、そういうことがあったからって言うてましたね。子供の頃に見なければね。

**塩野**：体験ですね。私も小学校でお手伝いするんですけど、今は小学生だとお母さんお父さんに経験がないので、一緒に川に入ってもどうしたらいいかわからない。鶏の足3 本か4 本かってぐらい。親世代がそうなので、親子で体験して欲しい。

**来場者男性**：池田さんに招待を頂いて、私はコンピュータグラフィックを大学で教えているんですけど、美人画、カフェの絵、猫の絵なども飾ってます。義援展で頂いた池田さんのアジサイの絵は大変気に入っています。仏教に興味があるのですが、お坊さんが言うには枯葉が落ちて悟るわけではないと…。仏像は形式に乗っ取って作られている？

**伊藤**：造像功德経というのがありますが、仏像を作るきっかけは、ある王様が



まして釈迦に教えを乞うたんです、しかし釈迦は天界に行ってしまうて居ない、待てど暮らせど帰ってこないし、苦しくてしょうがない。その時自分の国の工人に釈迦の像を作れといったんです。ところが釈迦をみている工人はあのような荘厳さは作れない、又そんな恐れ多いことはできないと皆尻込みをしてみました。そこで帝釈天に属する彫刻などを司る神の毘首羯磨天(びしゅかつまてん)が匠に変じて作った。それを見た王様は心の悩みが除かれたが、釈迦が帰ってきて比べると似ても似つかないものであった。ところが釈迦はそれでいいんだという、作られた像をみて自分の中の啓発を促すものだと。そういうのが仏像なんです。

**勅使河原**：その話は紀元前の話のように聞こえるけど、今現在の世界の問題ですね。仏教もイスラム原理主義もキリスト教も争って連日戦争している。イスラムの人は偶像崇拜禁止で、仏教だってもともと偶像崇拜禁止なんです。足の形とか、法輪の形でしか表せられなかった。しかしギリシャの文

化が入ってきて、ギリシャの神は人の形をとると、写実的な裸婦と男性のヌードでなくてはいけないと。それで美術は生まれて、現代の我々が苦しんでいる…。その時完全に像が消し去られていたら、現代は違っていた。アジア人の中には偶像崇拜禁止というのは、共感するのは見てはいけない、触れてはいけない。神道はそうなんだよね。ちょっと暗い話になってしまいましたね。

話を変えて、地域コミュニティー、町おこし、が美術界では大ブームで、地域アイデンティティが叫ばれてますけど、実際何のためにやるのか、わかっている人は少ない。これはずいぶん問題だと思っているんだけど、政治家を中心に行政の方が地域アイデンティティを欲しが







ている。アートでそれを作れと、それに乗りながらなんでだろうな、と考えている。これ皆様の方でこれについてはどう思われますか？これってアートそのものを救う動きじゃないかなとも思うわけなんです。売れないとか表面的な衰退もある。美術館にすれば固定客がいなくなる。美術大学で言えば新入生が減ってしまったとか。切羽詰まった目の前の悩みはあります。そういう次元じゃなくて、アートそのものが衰退しているんじゃないかと思う所があるんですよ。必要がなくなっているじゃないかと。そういうときに美術そのものが変わらないといけない。どこに向かって、どう変わればいいのか、これからのことはだれも教えてくれないでしょ。それで地域と関わることで何か見えてくるかなって。若い人たちはどう思っているかな？80年代以前の美術界に住んでる先生もいるけど（笑）。作った瞬間に価値があって、昔は何百万何千万で売れていったんですよ。若い人たちは価値があると思っていないのでは？

**鈴木（ひ）**：私は価値があるっ

ていたい、というのがあるので、それをどう人に伝えていくのが重要なと思っています。地域のイベントはいっぱいあるのですが、実際に一般の方を置き去りにしている、一部の美術ファンで盛り上がっている気がして、一般の人に聞いたら興味ないですという感じ。それを少しでも変えられたらなと思っています。今は買えば何でも買えちゃって、作るってことをあまりしなくなった。どう消費するかの方が重要視されている。素材にこだわって、材料を用意して作っていくことを、あまり教わらないのじゃないかな。あとは大学を卒業して5年くらいですが、絵を描くことを続けていくってこんなに難しいんだと思っています。先生たちの時代はどうでした？

**杉本**：みんな苦しいよ（笑）。苦しくない時代はない。不器用で続けてきてる。バブルでも売れている作家とない作家がいたわけだし、どの時代も陽の当たってるところと当たってないところがあって、戦時中だって、戦国時代だって絵描きという職業があった。何千年という歴史

の中で残ってきているわけだから、生活が苦しいからやめるとか、こんな時代だからやめるとか、そう言うことじゃないと思う。

**勅使河原**：こないだテレビでね、吉田正さんの音楽の番組があつてね、収容所の中で音楽をやって、生き延びたと。それからね、宮崎進さんという絵描き、彫刻家が神奈川県立近代美術館で展覧会やっていたけど収容所の中をテーマにした作品だけを並べてあつて、非常に衝撃的だった。それを繋げて思うことは、収容所のようなギリギリで生きるか死ぬかの所に立つと、美術とか音楽やっている人だけが生き残るんですよ。これは事実です。こんな無力な物がね、シベリアの収容所でなんで力を発揮するのか。何でだと思います？みんな重労働で喘いでいる時に、そこらの葉っぱをとって来て絵を描いてみんなに見せたり、それから歌を作って歌ったり。それが生きる上で最低限のことを甦らせる。それから収容所の中にいると管理者、ロシア人ですけど、その人たちは収容所にいる人たちと同じくらい酷い目にあっている、シベリアに送られて。彼らを励ますのは、それは絵と音楽。管理している側を励ますことで、全員で生き延びるようにするんですよ。たとえばここにいるみなさんがシベリアに送られたとする、確実に創作活動を始めるんですよ。署長さんの顔描いたりするとガラッと関係が変わりますよ。明日も生きるってなる。どうもそういうことらしい。

**江見**：それと美術をやっていると生活の合間で無い中で工夫しますよね。そういう姿勢が生き延びさせるのかな。そういう状

況では工夫しないとやっていけませんから。

**勅使河原**：その工夫がエネルギーというか喜びというか、人が気づかないところになにか喜びを感じないとやれないよね。評論家なんて絵描きの十倍くらい苦しいですよ。絵描きさんは絶滅危惧種なんです。美術評論家なんて絶滅しちゃったんですから（笑）。作家はそうは言いながら制作に楽しみ、気づかない喜びがあると繋いでいける。これも才能ですか。

**杉本**：続けていけるのも才能ですね。生活が苦しくなったら、絵が描けるのかということでもない。どんな世界も厳しい。たとえば、高校野球でみんながプロ野球選手になれるわけじゃない。やっぱり必要な数しか残っていない。絵描きもそうです。江見さんが言っているような、工夫しながらやりくりして。

**勅使河原**：最近、美術評論でとびぬけてる若者がいたんで会ったんですよ。普通だったら大学か美術館に定職を得るところだけど、いいですっていうんだよね。サラリーマンやりながら美術批評ができると思わないので、遠慮しますって。今の若い人にはそういう腹の座った感覚がある。全員それをしてたらダメですよ（笑）。特別思いがあったり、自信があったりで結構だと思いますね。でもそういう人たちが町を活性化させ、



みんなにアイデンティティを与える。それだけの身を捧げる、値打ちのある作業だと思えますし、たとえ今はお金という形で人に評価を得なくても、絶対に価値があるんですよ。逆説的に言うと一番美術から遠い人って、学芸員だと思うですよ。朝から晩までチラシから会場の設置、予算どりでしてぎっち会議があつて。完璧にアートから離れている仕事はキュレーターだね。どこに逆説があつて悲劇があるかわからないよ。わずか一秒でもいいから美術に正面きって向かえる人はやるべきだし、やれることは幸せだと私は思います。

**来場者（吉川英治記念館学芸員）**：私は文学館の学芸員なので、文学館だと作家の書斎を再現する展示をよくする。なんでかと言いますと、簡単に言うと文学は展示できないからなんですね。文学は本を読むものであつて、展示するものがないので。展示施設としての文学館が何をするかという作品の背景となる作家の人となりを知ってもらうことが文学館の役割だろうと。そのための手段として書斎を再現する。その人の趣味趣向が表れやすい。今回アトリエ展というのを聞いて思ったのが、そもそも美術館では作品を展示ができるのに、なぜ敢えてアトリエ展にする必要があるのか。それが一つと、文学館の書斎の再現は学芸

員がやりますから、第三者が資料を元に極力忠実に再現をする。多少の演出みたいな事はしますけど。今回はご本人方がやってらっしゃるので、実際のアトリエからどんなに離れていたとしても少なくとも嘘ではない。このスペースは実際のアトリエとはかけ離れた中に展示してますし、ショーケースなんかもあるわけがないもの。アトリエといいながらアトリエをテーマにした作品ということになるのだらうと思います。その辺どういう意識で展示なさったのかな、というのは興味あるのですが、いかがでしょう？

**伊藤**：アトリエを再現するのは難しい。もっと汚いですよ、土が落っこちていたり、屑が落っこちてたり。しかし、美術館ではそれはできない。土も石も置いてはダメ。一つの制約の中での展示をしなくてはいけない。ある程度こういう所で仕事してみたいな、というコンセプトが皆の中であつたのではないかと思います。ここより狭いところで作っている人もいれば、もっと広い場所でしている人もいます。今回はおもちゃ箱をひっくり

返したような展示がしたいなと思い、アトリエというコンセプトが出てきた。個々のアトリエというものの受け方、捉え方はまばらだったかなとは思いますが、仕事場、アトリエとしての展示はできたかと思います。

**杉本**：去年は『道具と遊ぶ、素材で遊ぶ』というテーマで展示しまして、その延長線でも仕事場、アトリエというテーマにしました。夏休みの期間にもなるので、子供たちにも理解してもらえるように。作っている過程を見てもらったり。美術館だったら作品しか展示してはいけないというわけではない。もっと色んな見せ方がある。色んな制約はあつたのですが、消防法など、規制があると展示の仕方も限られてきました。でもこういう作家のアトリエだけに集合している展覧会は今までにないよね。僕らも今まで一回もやったことはないです。記録としては最初で、最後かもしれないですけど（笑）。歴史的な展覧会であると思います。大げさに言えば、世界でも美術史上初めてかも（笑）。色んな職業で工程、段取りを



見て子供たちが見て、興味を持って、やってみたいなと思ってくれたらいい。

**勅使河原**：お二人のお話がこの展覧会のまとめになると思います。私は作品そのものだけで価値がある作品もたくさんあるんですけど、必ずしもそうでない、今現在をもっと見てほしい、と感じるものがある。それを上手い形で提示できる珍しい素晴らしい展覧会になるという予感がありました。その通りの成果があるかは皆さんのお気持ちの中にあるので、わかりませんけども。少なくとも私には最初で、最後かもしれない（笑）素晴らしい展覧会でした。それをもって本日は締めたいと思います。ありがとうございました。

**全員**：ありがとうございました。





## 「作家のアトリエ展」に寄せて——さながら竜巻のように

勅使河原 純  
(元世田谷美術館副館長)

青梅は関東平野の一等奥にあり、古来要衝の地であった。人も文化もここに集まり、そしてここからまた四方八方へと流れ出していく。そのせいか、いまでも古武士のようなサムライたちが大勢割拠している。もちろん、もはや刀や弓矢を振りまわしているわけではない。しかし大胆不敵な雰囲気の中で、手には絵筆やノミを、あるいは草木や陶土をしっかりと握り、くだらぬ権力や制度などには一歩も引かぬといった構えで、おの

が美の牙城を守っている。そのサムライたちが年に一度、満を持して決起するかのごとくに立ち上がるのが「青梅アート・ジャム」だ。今回も意気軒昂な13人が、ひと月半に渡って青梅市立美術館の瀟洒な空間に籠り、さながら世界と対峙するアートの要塞を守ったのだ。訪れる者として、眠りこけてはいられないのもまた、当然といわねばならない。テーマは「作家のアトリエ」。当日ギャラリーで展開されたというまでもなくアトリエは、

作家にとっては単なる制作の場所ではない。もやもやした情念に具体的な色とフォルムをあたえていく、制作上の秘密がぎゅっと詰まったサンクチュアリー（聖域）だ。それを美術館内に再現し、人様におみせするというのだから、相当に勇気がいったことだろう。徹底的にみてほしい気持ちと、決してみせたくない思いが相半ばしている。だからこそ面白いのである。当日ギャラリーで展開されたトークの中身は、記録誌を

みていただくとして、めっばう真剣なというか、レベルの高いやりとりが交わされたことは間違いない。わけでも私の記憶に残ったのは、作家それぞれの「気」があたりに充満し、美術のというよりももっと根源的な人間の営みが、さながら竜巻のように天空に立ち昇っていくのを目撃できたことである。

## ご挨拶

特定非営利活動法人 文化交流機構円座 理事長  
青梅アート・ジャム実行委員会 代表  
杉本 洋

今年で8回目を迎える2014 青梅アート・ジャムは「作家のアトリエ」をテーマにして開催されました。昨年は各作家のそれぞれのジャンルの素材と道具とそれらより生まれる作品を展示いたしました。今年はいつても作家がどのような空間で作品を制作しているか、全ての参加作家のアトリエを美術館

に持ち込み、仕事場と作品を再現展示するという、これまでの美術館にあまりない企画で行われました。会期中にはワークショップ・ギャラリートークにも多くの方に御参加を頂き、盛会いたしました。また、青梅市立美術館、関係各位にここで改めまして感謝を申し述

べさせていただきます。次回からの青梅アート・ジャムの展示は隔年のビエンナーレ形式となります。より一層、充実した内容で開催いたす所存でございます。何卒これからも青梅アート・ジャムへご支援いただきますようお願いいたします。

# Special Thanks

## 主催

NPO 文化交流機構「円座」  
青梅アート・ジャム実行委員会

## 共催

青梅市  
青梅市教育委員会

## 助成

一般社団法人 青梅市観光協会  
青梅市まるごとアート支援事業

## 協力

宗建寺  
Dining & Gallery 繭蔵  
カナダ・ヴィクトリア エクлекティク ギャラリー Eclectic gallery

## 撮影

橋本 憲一

## 記録誌制作

Studio Lesserpanda 坂内 ひろゆき  
山口 幹也  
長倉 陽一  
松島 美知子

## お問合せ

NPO 文化交流機構「円座」  
TEL 03-6321-3424 e-mail: enza@wave.dti2.ne.jp  
〒158-0097 東京都世田谷区用賀3-25-1

## 会場

青梅市立美術館  
東京都青梅市滝ノ上町 1346  
TEL 0428-24-1195  
JR 青梅駅より 徒歩 6 分



## 協力

JT-ART-OFFICE 勅使河原 純  
アル・ウィリアムズ  
ジェイソン・グロンディン  
ロバート・エイモス  
KISSAKO GREENTEACAFE (カナダ)  
太田 治美

## 第4回 東日本大震災義援展

## 参加アーティスト

阿部 静、阿部 修二、粟 千紗都、池田 菜摘、石田 美穂、伊藤 光治郎、上村 由希、エヴァレット・ブラウン、江見 高志、扇浦 レミイ、押元 一敏、香月 尚子、加藤 志穂、河合 祥子、カワハラタケル / keruco、北村 さゆり、木村 雅一、黒田 理恵、児玉 そよぎ、坂本 祐子、塩野 圭子、杉浦 裕二、杉本 洋、鈴木 麻美、鈴木 寿一、鈴木 ひろみ、染織工房「豆」(遠藤 和帆・多江子)、高崎友里香、高橋 学説、田尻 健二、楯 とおる、谷 えり子、塚本 光、土屋 禮一、つちやゆみ、飛田庸徳 / Toby、鳥居 葉子、長倉 陽一、永島 貴幸、長濱 恭子、橋 寛憲、林 ひろ美、平岡 栄二、深田 絵理、藤浪 瑛智、前田 純平、松本 剛、森本 記子、山口 幹也、山本 伸之、由木 浩子、若林 英子 (53 名)